10期　生演奏で楽しむ音楽科

～心豊かなひと時～

日時　　2022年12月9日　～　２０２３年1月27日（5回）
場所　　ナムの広場（池田市）
講師　　松本城洲夫とアンサンブル・サビーナ
テーマ　　北米・中南米・日本の西洋音楽史・映画音楽

三学期の松本城洲夫先生の講座プログラムはさながら「音楽の世界旅行だ」。
北米の音楽に始まり、中南米の音楽、日本の西洋音楽史等々と、先生の講義を受けてアンサンブルサビーナが生演奏でその音楽を奏でる、さながら音楽の世界旅行である。

小中学校の音楽教室に必ず掲げてある、世界の音楽家の肖像、私はなんの疑いもなく、この人たちが今の音楽の基礎を築いた偉人である、と信じてきた。そして学校では、せいぜいクラッシック音楽を作った人というぐらいで、特にその説明もなかった。

クラッシック音楽の礎は、ほぼすべてイタリア人が築いてきたというのに、掲示されているのは、すべてドイツ人ばかりである。これは太平洋戦争の名残なのだろうか。日本はドイツと軍事同盟を結んでおり、何かにつけドイツびいきだった。そして音楽家のほとんどがドイツに留学し、そこでドイツ人による音楽を学んできた。少なくとも私が音楽を勉強した小中学校を通じて、イタリア音楽のイの字も教えてもらわなかった。

アンサンブルサビーナの演奏を聴いていて気づかされるのは「あれ、指揮者がいない」ということであり、また、クラッシックにポップスなどの間に全く壁がない。また、唱歌などもあってさらには日本の民謡もある。私にはこれらのジャンルは全く別のものであって、別の人が演奏するものと思ってきたので、正直おどろきだった。

クラッシックは高尚な音楽であり、ポップスは低級である。民謡などは一部の地域のほんの一部の人にしか知られていない低俗なものである。これらの認識はほとんどの日本人が持つ一般的な印象だっただろう。

演奏は指揮者があって、全員の息であるとかテンポ、あるいは曲のイメージや解釈などを決めていくのでは、と思っていたから、指揮者のいない楽団には全く面食らった。

また、演奏者の人数や編成もその都度変わってくるので、果たして編曲はだれがやっているのだろと大きな疑問だった。

これらの疑問を感じながらも、演奏は全く素晴らしいのである。さらに不思議なことは、演奏者がしょっちゅう楽器を持ち代えるのである。いま、今バイオリンを弾いてたと思ったら、いつの間にかパーカッションをたたいている。あるいはピアノに代わっている。そこに全く違和感がなく、その交代した音が絶妙なのである。

それと、また弾き方もそれぞれだ。普通オーケストラを見ていると、弓の上げ下げ、その位置が全員全く同じなのである。しかし、アンサンブルサビーナは、それぞれに自由だ。弓の動かし方も、体でのリズムの取り方もそれぞれに特有で、一人一人が独奏しているかの体である。

サビーナの演奏を聞いていると、もともとクラシックとポップスの壁などなかったのだ。聞く側が勝手に作っていたのだと思った。だから普通と思っていたクラッシクは高尚でポップスやましてや日本の演歌などは低俗であるとの認識も全くの誤解であったと感じた。

【松政　恒夫】